



〔学会〕 第1338回 千葉医学会例会 第37回 歯科口腔外科例会

日 時：平成28年11月5日（土） 10：00～16：35

場 所：千葉大学医学部附属病院外来診療棟

3階ガーネットホール（大講堂） セミナー室1

1. 先天性第V因子欠乏症患者の外科手術における 周術期管理の経験

大島早智, 小池一幸, 肥後盛洋
坂本洋右 (千大)

今回新鮮凍結血漿（FFP）アレルギーの先天性第V因子欠乏症患者に顎骨嚢胞摘出術を施行し、周術期管理を遂行した。患者は19歳男性、左側下顎智歯部の歯肉腫脹を主訴に紹介受診された。血液検査にてPT 16.1秒、APTT 58.7秒と延長し第V因子活性は1%と低下していた。既往歴にFFPアレルギーを認めたため当院小児科に対診した。術前に抗アレルギー薬内服とFFP投与直前にステロイド・抗アレルギー薬の投与を行った。FFPは負荷試験にもとづき術前日から術翌日までで計12単位投与し、第V因子活性を20%以上に保ち、良好な止血を得た。

2. 歯肉腫脹と出血の原因が壊血病であった1例

神津由直（千葉県こども）

ビタミンC欠乏症（壊血病）は、飽食の現代では既に過去の疾患と思われがちである。今回、下肢痛、歩行困難、嘔声、歯肉腫脹と出血を主訴に来院し、精神発達遅延や自閉症など認めず偏食のみで壊血病を発症した3歳5か月男児を経験した。血漿ビタミンCは $0.2\mu\text{g/ml}$ 以下と著明に欠乏しており、ビタミンB1も潜在的欠乏を認め、最終的に壊血病と脚気の合併と診断した。ビタミン剤の投与により症状は劇的に改善した。

3. 摂食嚥下障害患者に対する地域包括ケアについて

白土謙之介, 小河原克訓, 鈴木悠哉
鈴木理絵, 石毛俊作, 杉山健太郎
大角仁美, 高橋喜久雄（船橋中央）

近年、摂食嚥下障害を持つ患者への対応は大きな課題である。対応を疎かにすると、誤嚥や窒息の惹起に加え、低栄養状態に陥るリスクが高くなる。摂食嚥下

評価訓練を行うことで、多くの胃瘻・経管栄養患者が経口摂取を再開できる可能性がある。有効な支援を受けられる地域作りを目指し、地域包括ケアを推進している。今回我々は地域の連携病院として摂食嚥下に関する必要な医療資源を提供し、地域包括ケアに貢献したので報告した。

4. 手術リスク評価法E-PASSによる術後合併症発症リスク評価と周術期口腔機能管理

林 文彦, 坂本洋右 (千大)

周術期口腔機能管理と術後合併症リスク評価法E-PASSについて検討した。E-PASSにおける総合リスクスコアCRSは、患者の生理機能と手術侵襲から規定される。CRSが0.2以上で、術後合併症発症率の有意な減少を認めた。CRSが0.2以上の群は、高齢で手術侵襲が大きい傾向にあった。疾患にとらわれず、年齢や手術侵襲を考慮し、術後合併症発症リスクを把握することで、周術期口腔機能管理を真に必要な患者へ重点的に行う指標になりうると考えられた。

5. 扁平上皮癌亜型の病理組織学的特徴と臨床統計

有田恵利奈, 小池一幸, 肥後盛洋
坂本洋右 (千大)

扁平上皮癌には6種類の亜型が存在する。過去10年間の当科における口腔扁平上皮癌亜型は11例あり、渉猟し得た限りでは本邦で190例の報告がある。口腔に発生した扁平上皮癌亜型は、疣贅癌が最も多く、予後は扁平上皮癌と比較し疣贅癌以外の亜型は不良であった。また、生検時と最終診断で結果が異なる場合があるため病理組織学的な腫瘍全体の評価が重要である。

6. 口腔腫瘍の診断における18F-FDG PET/CT有用性の検討

永塚啓太郎, 中嶋 大 (千大)

当科の口腔腫瘍症例における18F-FDGの集積度を, SUVmax値を用いて評価した。唾液腺腫瘍では良悪性腫瘍共にFDGの異常集積を認め、鑑別診断は困難であった。唾液腺悪性腫瘍を組織学的悪性度で分類したところ、高悪性度群は低中悪性度群に比べ高いSUVmax値を示した。口腔扁平上皮癌ではFDGの集積度は腫瘍径、分化度との相関を認めた。また、予後不良群の原発巣のSUVmax値は良好群と比較して高く、FDGの集積度は予後予測因子になりうる可能性が示唆された。

7. 糖尿病患者の口腔内環境に関する臨床統計的検討

廣嶋一哉, 福本正知, 渡邊俊英
(君津中央)

内分泌代謝科と連携し糖尿病教育入院患者の口腔内のスクリーニングを行い、臨床統計的検討を行った。

HbA1cとの関連は否定的であったが、重度歯周病の存在や咬合状態といった顎口腔機能と糖代謝には関連性を認める結果となり、歯科治療が生活習慣病に関与する可能性が示唆された。さらに地域歯科医院と病院が連携する地域包括的な治療体制を構築するため医科歯科連携の会の開催、地域歯科医院マップの作製を行った。

8. 唾液腺腫瘍における診断・検査法の有用性の検討

加藤郁子, 大和地正信, 中嶋 大
笠松厚志 (千大)

唾液腺腫瘍は良性・悪性ともに多彩な組織像を呈するため、理学所見や画像診断を総合的に判断し、組織学的検査をもとに診断、治療法を選択する必要がある。今回当科で行っている唾液腺腫瘍に対する検査・診断法の有効性を予後との関係で検討したので報告した。術中に被膜を破らず腫瘍の安全域を設定して切除する術中迅速全切除生検術は、腫瘍細胞を播種させることなく診断が可能な検査であり、予後に関しても良好な結果が得られた。

9. 口腔癌術後の口腔機能評価について

和賀井 翔, 大和地正信 (千大)

口腔癌術後の機能を原発部位および切除範囲別に、また咬合支持域との関連と併せて評価した。口腔機能

は、摂食、発音、嚥下、舌圧の4項目について行った。舌癌症例では、舌の可動部に加え舌根がその機能に重要であり、切除範囲が広い場合は十分なボリュームでの再建が口腔機能の維持につながることを示唆された。また、咬合関係の回復により摂食機能に加えて発音機能の改善が図られ、硬組織再建により摂食機能の回復が得られることが示唆された。

10. 下顎骨に生じた二次型エナメル上皮癌の1例

加瀬裕太郎, 大和地正信, 中嶋 大
笠松厚志 (千大)

エナメル上皮癌は歯原性腫瘍の0.5%を占める稀な疾患である。今回、エナメル上皮癌の治療経験について報告した。患者は63歳男性、術前生検のエナメル上皮癌の診断により、腫瘍切除術、両側頸部郭清術、腓骨遊離皮弁を用いた下顎骨再建術を施行した。エナメル上皮癌は生検時の診断が困難で、本邦のエナメル上皮癌35例のうち8例において遠隔転移を認めた。よって局所および肺を中心とした経過観察が必要であると考えられた。

11. 上顎洞を圧排した腺様歯原性腫瘍の1例

馬場隆緒, 林 幸雄 (成田赤十字)

7歳女児。上顎左側臼歯部に生じた上顎洞および鼻腔を圧排した腺様歯原性腫瘍の1例について報告する。パノラマX線、CTにて埋伏歯3本を含む嚢胞性透過像および内部に点状石灰化病変を認めた。腫瘍は周囲粘膜との癒着なく一塊として摘出可能であった。病理組織学的には、腫瘍細胞の腺管様構造や渦巻状構造を認め、腫瘍実質内には石灰化巣の散在性形成が見られた。自験例は発生部位および埋伏歯の本数において非常に稀な症例であった。

12. 小児の口底部に生じた舌下型類皮嚢胞の1例

宮本 勲, 小山知芳 (深谷赤十字)
伊藤 博 (同・外科)
肥後盛洋, 笠松厚志, 坂本洋右
鶴澤一弘 (千大)

患者は6歳女児、口腔内の腫瘍の精査・加療目的にて近歯科より当科紹介受診した。臨床経過、臨床所見より口底部類皮嚢胞または類表皮嚢胞と診断し、摘出した。病理診断は類皮嚢胞であった。術後9か月が経過した現在、再発および合併症等なく経過良好である。まれに組織の残存により再発した例も報告されているため、今後も慎重に経過観察を行う必要があると考えられた。

13. 舌に発生した孤立性線維性腫瘍 (SFT) の1例

福本正知, 廣嶋一哉, 渡邊俊英
(君津中央)

患者は28歳男性, 10年以上前より舌の無痛性腫瘍を自覚していた。舌尖正中にφ17mmの弾性軟, 広基状腫瘍を認め, 舌良性腫瘍の診断下に腫瘍切除術を施行した。腫瘍は薄い被膜を持ち, 内部は黄色充実性であった。HE染色では紡錘形細胞の不規則・密な増殖を認め, 組織学的悪性像は見られなかった。また免疫染色にてCD34, Bcl-2, CD99陽性, SMA陰性を認め, 確定診断は孤立性線維性腫瘍 (SFT) となった。

14. 下唇に生じた孤立性神経線維腫の1例

小山知芳, 宮本 勲 (深谷赤十字)
伊藤 博 (同・外科)
肥後盛洋, 笠松厚志, 坂本洋右
鵜澤一弘 (千大)

患者は32歳女性, 初診10年前から自覚していたが, 疼痛がなかったため放置した。今回, 近歯科を受診した際に同病変を指摘され, 精査加療目的に当科を紹介受診した。一連の臨床経過, 臨床所見より下唇の良性腫瘍と診断し, 切除生検を施行した。病理診断は神経線維腫であった。孤立性の神経線維腫は再発, 悪性化の可能性は低いとされているが今後も十分な観察が必要である。

15. 口腔内に生じた透析アミロイドーシスと考えられた1例

安藤壽晃, 小池一幸, 肥後盛洋
坂本洋右 (千大)

アミロイドーシスとはアミロイドタンパクが臓器や組織の細胞外に沈着することにより機能障害を惹起する代謝性疾患である。今回, 臨床所見および病理診断より透析アミロイドーシスと考えられた症例を報告した。本邦の報告では口腔内に生じたアミロイドーシスは52例。その中で透析アミロイドーシスは10例であり, 8例は舌に発生していた。

今後も口腔内のみではなく, 全身検索も含めた慎重な経過観察が重要であると考えられる。

16. 口腔癌術後の舌圧測定器を用いた機能評価

岡 則智, 坂本洋右 (千大)

当科の口腔癌術後の患者98症例を対象に最大舌圧測定を行い, 従来の口腔機能評価との相関, 舌接触補助

床の使用による変化を検討した。舌圧値と口腔機能評価項目との間に一定の関連性を認め, 他施設との比較では当科における口腔再建法は適切な皮弁量と方法の選択をしていると考えられた。また, 舌圧値は舌接触補助床の適用診断, 設計, 効果判定において重要な情報となることが示唆された。

17. 神経線維腫症2型患者に見られた舌神経鞘腫の1例

金沢春幸 (さんむ医療センター)
山本淳一郎, 澤井裕貴, 小出奈央
大和地正信, 笠松厚志 (千大院)

【症例】36歳女性。

【主訴】舌腫瘍による摂食障害。

【既往歴】30歳時に難聴の精査で神経線維腫症2型(両側聴神経鞘腫)の診断。

【家族歴】長女が神経線維腫症2型。

【現病歴】数年前に舌の無痛性腫瘍に気づく。

【全身所見】両側聴力機能喪失, 皮膚は健康色でカフエオレ斑はない。

【口腔内所見】左舌背部前方8x6mm, 後方30x20mmの2個の半球状腫瘍を認める。

【処置】腫瘍摘出術施行し神経鞘腫の病理診断。

18. 一卵性双生児に発症したケルビズムについて: 7年間の経過

鈴木理絵, 小河原克訓, 白土謙之介
鈴木悠哉, 石毛俊作, 杉山健太郎
高橋喜久雄 (船橋中央)
小松悌介 (同・病理)
小池博文 (小池歯科医院)

【患者】7歳男児。

【現病歴】2009年8月, 両側下顎角部腫脹の精査・加療依頼にて当科紹介受診となった。臨床所見, X線所見, 病理組織検査によりケルビズムと診断された。一卵性双生児の第二子にも同様の所見がみられた。

【処置】2013年, 双生児ともに左側大白歯部搔爬減量術を, 第二子は下顎埋伏3番部の搔爬術を併せて施行した。今回, 極めて稀な一卵性双生児に発症したケルビズムと診断された症例を経験し, 7年の経過を終えたので報告した。

19. 上唇に生じた血管平滑筋腫の1例

岡本篤志, 山本亜有美, 花澤康雄
(千葉メディカルセンター)
河崎謙士 (京成船橋歯科)

血管平滑筋腫は血管壁平滑筋に由来する腫瘍で、口腔領域において比較的にまれな疾患である。患者は75歳女性、右側上唇の腫瘤を主訴に受診。上唇に径4mm程の弾性軟の腫瘤を触れた。唾液腺腫瘍の疑いもと局麻下に摘出術を施行し術後3か月経過するが再発なし。摘出物は長径3.5mmであった。免疫染色で平滑筋様細胞に陽性を示し病理診断を血管平滑筋腫とした。なお、われわれが渉猟し得た口腔の血管平滑筋腫では自験例が最小であった。

20. 顎顔面骨折の術後に悪性症候群を発症した1例

嶋田 健, 中津留 誠 (千葉医療センター)

悪性症候群は抗精神病薬などの投薬を契機に、発熱、自律神経症状、錐体外路症状を発症し、時として致死性となる重篤な疾患である。これまで極めてまれに外科手術後に発症例することが報告されている。今回我々は、顎顔面骨折の手術後に投与した薬剤が原因で発症したと思われる悪性症候群の1例を経験したため報告した。

21. 組織球性壊死性リンパ節炎(菊池病)の1例

齋藤智昭, 伊豫田 学, 笠間洋樹
(千葉労災)
鵜澤一弘 (千大)

組織球性壊死性リンパ節炎は、1972年菊池、藤本らにより報告された炎症性リンパ節疾患であり、その1例を経験した。症例は、28歳男性で左側頸部の腫脹及び発熱のため菌性感染症が疑われ当科紹介受診となった。しかし、菌性感染は明らかでなく臨床経過、採血、画像検査の結果より上記疾患が疑われリンパ節生検術を施行し確定診断を得た。本疾患は、頸部リンパ節腫脹を伴う疾患の鑑別診断として考慮すべきであると考えられた。

22. 化膿性顎関節炎が疑われた1例

杉山健太郎, 鈴木理絵, 白土謙之介
鈴木悠哉, 石毛俊作, 小河原克訓
高橋喜久雄 (船橋中央)

化膿性顎関節炎は無治療の場合、数日間で関節破壊を来し、重篤な機能障害を残すこともある準緊急疾患で

ある。また、高齢者の増加や免疫抑制治療の増加により今後症例数が増加することも予測され、その重症度から考えて確実に除外しておきたい疾患のひとつでもある。一般的には、膝関節などの大関節に生じ、顎関節での発症はまれである。今回、われわれは化膿性顎関節炎が疑われた1例を経験したので、その概要を報告した。

23. 下唇扁平苔癬様粘膜炎から癌化しAbbé-Estlander法で再建した1例について

山本亜有美, 岡本篤志, 花澤康雄
(千葉メディカルセンター)
石山信之 (石山歯科医院)

患者は62歳男性。2年前から下口唇に粘膜炎を繰り返し、2011年11月に当科を紹介され受診。右側下口唇に発赤を伴うびらんを認め、扁平苔癬の臨床診断のもと経過観察した。2014年7月に隆起性病変に変化し、生検で扁平上皮癌と診断された。全身麻酔下で下唇腫瘍切除、Abbé-Estlander法を用いて口唇再建を行い、術後1年が経過した現在、再発はなく経過良好である。

【病理組織学的診断】中分化型扁平上皮癌。

24. 統合失調症合併症の下顎歯肉がん術後瘢痕により開口障害を認めた1例

佐藤志興, 内田文彦, 柳川 徹
菅野直美, 長谷川正午, 山縣憲司
武川寛樹 (筑大)
佐藤晋爾 (同・精神科)
山崎善純 (牛久愛和総合)
生井友農 (筑波学園)
武内保敏 (水戸済生会総合)

統合失調症はおよそ100人に1人の割合で思春期に好発する精神障害である。今回統合失調症合併症の下顎歯肉がん術後瘢痕により開口障害を認めた1例を報告する。症例の概要49歳女性。2013年4月初旬に左側下顎歯肉の違和感を主訴に近医歯科口腔外科紹介受診。当科での治療目的で紹介となった。下顎歯肉がん診断。入院後第11病日、全身麻酔下で下顎骨悪性腫瘍切除術、分層植皮術施行。創部瘢痕化にて開口不能となり、瘢痕切除、植皮術施行した。その後再度瘢痕による開口困難が生じ翌年にNasolabial flapにて頬粘膜を再建し開口可能になった後に転院となった。

【考察】精神科との連携が良好であったため当科への安心感が生まれ治療が円滑に遂行できたと考える。

25. 心臓移植患者の口腔機能管理に関する検討

澤谷祐大, 永山敦子, 内田大亮
川又 均 (獨協医大)
大久保真希 (佐野厚生総合)
齋藤正浩 (菅間記念)
大友文雄 (大友歯科医院)

日本臓器移植ネットワークの心臓移植希望者登録には、手術に際して障害となる口腔内病変がないことを歯科口腔外科専門医が証明する必要がある。当院では心臓移植は行っていないが、5症例の心臓移植待機患者および移植後患者に対し、口腔外科的介入を含めた口腔機能管理を行うことで、移植前、周術期、移植後の感染管理の一助となりえた。そのうち1症例は、心臓移植が施行され移植後合併症を起こすことなく経過している。

26. 当科における口腔扁平上皮癌の遠隔転移症例に関する臨床的統計

恩田裕香, 土田修史, 長谷川智則
栗林恭子, 越路千佳子 (獨協医大)

口腔扁平上皮癌の遠隔転移症例の臨床的検討を行った。初診時に遠隔転移を認めず、当科にて一次治療を行った口腔扁平上皮癌230例中、遠隔転移を認めたのは19例(8.3%)であり、遠隔転移部は肺転移と骨転移であった。原発巣の進展、浸潤度と遠隔転移出現に有意な関連は認められなかった。初診診断でN0であった症例で、遠隔転移を認めたのは6例(31.6%)だった。初診から遠隔転移出現まで平均12.4か月、遠隔転移出現から死亡まで平均3.6か月であった。

27. 当科における過去5年間の舌に発生した腫瘍性病変の検討: 舌縁部に発生した異所性扁桃について

三宅悠介, 篠塚啓二, 寺岡 潤
坐間 学, 小池 亮, 野口博康
植木皓介, 清水 治, 金子忠良
大木秀郎 (日大)
外木守雄 (同・病理)

舌に発生した腫瘍性病変、296症例について検討を行った。部位別には舌縁及び舌尖部が大半を占めており、歯や食物による機械的刺激が受けやすい部位であった。組織型としては、線維腫が最も多く、次いで粘液嚢胞、乳頭腫であった。その中で、発生が稀であった異所性扁桃について報告した。本症例は扁桃の定義として支持されているFiorettiの4条件全ては満たし

ていなかったが、臨床所見とから総合的に判断し異所性扁桃と診断した。

28. びまん性硬化性下顎骨髄炎に対するパミドロネートの治療効果

角田尚之, 小宮山雄介, 森 俊光
内田大亮, 川又 均 (獨協医大)
栗林伸行, 泉 さや香, 和久井崇大
(上都賀総合)

びまん性硬化性骨髄炎(diffuse sclerosing osteomyelitis, DSO)は、原因不明で難治性の慢性硬化性骨髄炎の一種であるが、近年ビスフォスフォネート製剤(BP製剤)の投与がDSOに著効したとの報告が集積されている。今回、当科で経験したDSO難治症例4例に対して第2世代BP製剤であるパミドロネート30mgの投与を行ったところ、全例において投与後1週間以内に疼痛が消失し、その有効性が確認された。本治療は、今後DSOの標準治療となる可能性が示唆される。

29. 当科における過去7年間の上顎正中埋伏過剰歯に関する臨床的統計

志村美智子, 木内 誠, 八木沢就真
内田大亮, 川又 均 (獨協医大)
博多研文 (佐野厚生総合)
和久井崇大 (菅間記念)
大友文雄 (大友歯科医院)

今回われわれは、過去7年間の上顎正中埋伏過剰歯93例において臨床的統計を行い、主に埋伏状態と抜歯の難易度に関する検討を行った。その結果、男女比は男:女=4.5:1であった。埋伏状態は逆生、順生、混合、水平の順で多かった。佐野らの深度分類を用いて検討を行ったところTypeⅢが最も多く、深度別の障害はTypeⅠは鼻腔への障害が多く、TypeⅡ、Ⅲは歯への障害が多く認められた。手術時間はTypeⅠで長くなる傾向が認められた。

30. 150症例、20年間の喪失歯数について

大木保秀 (旭町歯科)

150症例の平均喪失本数は20年間で2.12本/人、おおむね8,020推進財団の永久歯の抜歯原因調査報告書の推計値を裏付ける数字となっている。20年間1本も歯を喪失しなかった人は78人(52%)。2本以下の喪失者が110人7割以上を占める。9本以上の多数歯を喪失した人は10人(6.7%)。循環器疾患の既往歴がある人の歯の喪失が多い印象を持った。

31. デンタルCTが診断・治療計画の決定に有効であった症例: デンタルCTの有用性とその活用法

五十嵐万理, 中田康一, 鈴木元太郎
片海紫苑里, 秋葉雄登, 須藤亜紀子
高橋香織, 石上享嗣, 秋葉正一
(旭中央)

日常臨床において画像診断は必要不可欠なものとなっている。

デンタルCTの登場により, 短時間照射でゆがみの少ない精細な画像を得ることが可能となった。

今回, 利用状況と診断, 治療計画の決定に有効であった症例について報告した。

結果, デンタルCTは歯牙を主とした硬組織の評価に優れ, 今まで不可能とされていた歯根骨折などの歯のトラブルが診断可能となり「原因不明の症状」の原因を究明するための新たな可能性が見いだせた。

32. パノラマX線写真とCBCT画像における下顎管の走行状態についての検討

鈴木悠哉, 小河原克訓, 白土謙之介
鈴木理絵, 石毛俊作, 杉山健太郎
高橋喜久雄 (船橋中央)

下顎智歯抜歯術は, 口腔外科において頻度の高い手術であり, その合併症の1つに下歯槽神経麻痺がある。抜歯の際, 智歯と下顎管の位置関係を把握することは重要であり, 当科ではパノラマX線写真で智歯と下顎管との近接症例はコーンビーム断層撮影法 (CBCT) も撮影している。今回, われわれはパノラマX線写真とCBCT画像における智歯の埋伏状態と下顎管の走行状態について検討したので報告した。

33. CTを用いた上顎大臼歯根管数の評価

菊地翔太, 大和地正信, 中嶋 大
笠松厚志 (千大)

近年CTの普及により, 容易かつ非侵襲的に生体内の構造を把握することが可能となった。

本研究ではCT画像を用いて同一生体内の左右側上顎第一大臼歯, 第二大臼歯に関して歯根, 根管数の比較を行い, 考察を加えた。歯根数, 根管数ともに左右差は認められなかったが, 根管数においては第二大臼歯が4根管であった場合, 第一大臼歯も4根管である症例が有意に多く認められた ($p \leq 0.01$)。またCTを用いた場合の4根管の発見率は, Buhreyらの報告における肉眼での探索と同程度の精度であることが示唆

された。今回の研究により得られた結果は, 臨床において根管数の予測に有益であると考えられる。

34. 亜鉛輸送体の過剰発現による口腔癌増殖メカニズムの包括的機能の解明

石田 翔, 坂本洋右, 笠松厚志
鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

ZIP4とOSCCの関与を分子生物学的に解析し検討した。mRNA, タンパクレベルのZIP4の発現亢進, 癌組織での腫瘍増殖との相関を認めた。shZIP4では細胞増殖能低下, 細胞内への亜鉛取込み抑制を認めた。マスキング剤を作用し亜鉛の取込みを抑えたところ細胞増殖の抑制を認めた。以上よりZIP4は口腔癌の新規分子標的遺伝子であり, マスキング剤が癌増殖を抑制する新規分子標的治療薬であると示唆された。

35. 口腔癌におけるGTPase関連タンパクの過剰発現が及ぼす癌転移機構の解明

高原利和, 大和地正信, 笠松厚志
鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

GTPase活性化タンパクであるSIP1は口腔扁平上皮癌由来細胞にて, mRNAおよびタンパクレベルで過剰発現を認めた。また, 口腔癌組織においてもSIP1の発現は有意に亢進し, リンパ節転移と有意な相関関係を認めた。さらに, SIP1の発現抑制により細胞遊走能, 浸潤能の低下を認め, 接着能は維持された。SIP1はIntegrin beta1およびMMP7の発現調節に関与することで口腔癌の転移に寄与していることが示唆された。

36. 口腔癌におけるアクチン結合タンパクの包括的発現機能解析

小出奈央, 坂本洋右, 笠松厚志
鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

microarray解析で発現亢進を認めたLymphocyte cytosolic protein 1 (LCPI1)について, 口腔扁平上皮癌 (OSCC) での発現・機能を検討した。LCPI1はOSCC由来細胞株において口腔粘膜上皮細胞と比較し, mRNA, タンパクレベルで発現亢進を認めた。臨床検体を用いたIHCでは, 腫瘍径・リンパ節転移に相関を示した。LCPI1発現抑制株では増殖・浸潤・遊走能低下と局在変化を認めた。同定した阻害候補薬は, 細胞増殖・浸潤・遊走能を抑制した。以上よりLCPI1の口腔癌新規治療標的としての可能性が示唆された。

37. TGF- β super family ligands 関連遺伝子は口腔癌転移能と関連する

喜田晶洋, 中嶋 大, 笠松厚志
 鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

マイクロアレイ解析で発現亢進を認めたINHBBについて、口腔扁平上皮癌 (OSCC) における発現状況を検討した。INHBBは口腔扁平上皮癌 (OSCC) 由来細胞株において口腔粘膜上皮細胞と比較し、mRNAとタンパクレベルで発現亢進を認めた。また、臨床検体を用いた免疫組織化学染色では、INHBBとリンパ節転移に相関関係があることを示した。INHBB発現抑制株を用いた機能解析において、INHBB分泌型であるactivin Bを処理した細胞は転移能を獲得する事がわかった。以上よりINHBBが転移・浸潤において重要な役割を果たすことが示唆された。

38. DNA 結合転写促進因子の発現亢進は口腔癌の進展に寄与する

武内 新, 大和地正信, 笠松厚志
 鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

DNA結合性転写因子TEAD4は、口腔扁平上皮癌において正常口腔粘膜組織と比較し有意な発現亢進 ($P < 0.05$) を認め、免疫組織学的染色において腫瘍径との相関を認めた。TEAD4発現抑制株を用いて機能解析を行い、細胞増殖能の低下および細胞周期のG1期抑制を認めた。関連遺伝子であるYAPとの口腔癌における共局在が確認された。以上よりTEAD4は口腔癌の進展に寄与することが示唆された。

39. ユビキチン結合酵素の高発現と口腔癌進展調節メカニズムの解明

吉村周作, 中嶋 大, 笠松厚志
 鶴澤一弘, 丹沢秀樹 (千大院)

ユビキチン修飾関連遺伝子UBE2Sと口腔扁平上皮癌 (OSCC) の関連性を比較検討した。UBE2Sは口腔癌にてin vivo, in vitroで発現亢進を認め、臨床指標にて腫瘍径との相関を認めた。発現抑制株の機能解析では増殖能の低下、細胞周期のG2/M arrestを認め、P21発現増強とAPC3発現減弱を認めた。UBE2SはP21分解亢進によるOSCC増殖への関与が示唆された。

40. 小胞体膜タンパクの発現増強と口腔癌との関連性の検討

福岡玲雄, 中嶋 大, 鶴澤一弘
 丹沢秀樹 (千大院)

小胞体膜の輸送タンパクであるトランスロコンを構成するTRAM2の口腔扁平上皮癌 (OSCC) における発現を解析した。ヒト正常口腔粘膜上皮と比較し、OSCC由来細胞株においてmRNA及びタンパクレベルで有意な発現亢進を認めた。臨床検体60例の免疫組織染色ではOSCC組織においてTRAM2の発現亢進を認め、臨床指標との相関において腫瘍径で有意な相関関係を認めた。TRAM2はOSCCのバイオマーカーとなりうる可能性が示唆された。

41. 細胞死に関連した腫瘍抑制遺伝子の探求

山本淳一郎, 中嶋 大, 鶴澤一弘
 丹沢秀樹 (千大院)

ヒト口腔扁平上皮癌 (OSCC) におけるマイクロアレイ解析で発現減弱を認めたWDR34について解析を行なった。OSCC由来細胞株においてmRNA・タンパクレベルでの有意な発現減弱を認めた。アポトーシス解析では、OSCC細胞株においてアポトーシスの抑制が起きていることが確認された。WDR34はNF- κ B活性化経路であるTAK1に負の相関を持っているとの報告があり、WDR34はアポトーシスの抑制を介して腫瘍の増殖に影響していることが想定される。

42. 脱アセチル化酵素複合体因子の発現増強における口腔扁平上皮癌への影響

澤井裕貴, 中嶋 大, 鶴澤一弘
 丹沢秀樹 (千大院)

脱アセチル化酵素複合体因子の一つであるDNMT1は口腔扁平上皮癌 (OSCC) 由来細胞株における網羅的発現解析で高発現を示した。OSCCとの関連性について解析を行ったところ、ヒト正常口腔粘膜上皮と比較しOSCC由来細胞株においてmRNA及びタンパクレベルで有意な発現亢進を認めた。臨床検体60例での免疫組織染色では、DNMT1の発現と腫瘍径との有意な相関関係を認めた。DNMT1はOSCCの増殖に関与することが示唆されるため今後さらなる検証を進めていく。

43. 血液凝固因子輸送複合体の口腔癌における発現状態の検討

深町 恵, 坂本洋右, 鶴澤一弘
丹沢秀樹 (千大院)

血液凝固因子輸送複合体 (MCFD2) は, 血液凝固因子の細胞内輸送に関わるカルシウム結合タンパクであり, 口腔扁平上皮癌における発現状況を検索した。細胞株において mRNA とタンパクでの発現亢進を認めた。臨床検体において, 免疫組織化学染色を行い臨床指標との相関を確認し局所リンパ節転移と相関を認めた。以上より, 口腔扁平上皮癌と MCFD2 の発現において関連性が示唆された。

44. アラキドン酸カスケード上流遺伝子と口腔癌との関連性を検討する

大久保康彦, 大和地正信, 鶴澤一弘
丹沢秀樹 (千大院)

アラキドン酸カスケード上流遺伝子である DAGLA について解析した。DAGLA は口腔粘膜上皮細胞と比較し口腔扁平上皮癌 (OSCC) 由来細胞 9 株において, mRNA およびタンパクレベルで過剰発現を認めた ($p < 0.05$)。免疫組織化学染色では, 正常組織と比較し DAGLA の有意な発現亢進を認め, 腫瘍径との相関関係を認めた ($p < 0.05$)。以上より, DAGLA が OSCC の増殖に関与する可能性が示唆された。

45. CDDP 耐性遺伝子阻害剤による CDDP 感受性増強法の開発

戸枝百合子, 小池一幸, 鶴澤一弘
丹沢秀樹 (千大院)

シスプラチン (CDDP) 耐性遺伝子阻害剤であり抗血小板薬でもあるシロスタゾールを用いて, CDDP 投与増強効果を検討した。In vitro においてシロスタゾールによる CDDP 感受性増大を確認し, In vivo において抗腫瘍効果を認めた。ドラッグ・リポジショニングとして既存薬であるシロスタゾールと CDDP を併用することは, CDDP 投与効果の増強に有用であると考えられた。